

# 知的財産事例

## 株式会社ワン・ステップ

# 事業拡大に向けて知財取得や権利保護を意識 「エアー素材」の可能性を模索した先で支援機関と連携した知財活用

### 事業内容

2002年設立  
イベント遊具企画・レンタル・販売  
防災・減災・感染症対策・医療関連機器の開発・販売・レンタル

### 知的財産権と内容

特許第7008390号	エアー式陰圧室装置
商標第6648729号	ミストバルーン
商標第6588614号	エアプレイパーク
商標第6423504号	ジョイントエアーパーネル
商標第6624275号	フィールドオベユニット

他 商標権2件

(2024年12月現在)

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA



代表取締役社長 山元 洋幸さん

### 早くから起業を意識し 様々な経験を積みながら遊具業界へ

学生時代から宮崎市中心市街地活性化事業に出店するなど、経営者としてのイメージを膨らませていた山元社長。大学卒業後はその行動力を活かし、「まずは30歳までチャレンジしてみよう」とさっそく起業を果たした。当時所属していたフットボールチームで知り合った新聞販売店の方に敷地を借り、中古車の販売業からスタートしたという。しかし、次第に「他社と差別化しづらく、なかなか強みを発揮できない」という課題が生まれ、転身を決意。そのタイミングで、観光施設を運営していた知人から、子どもにも喜ばれる施設にできないか？と相談されたことが、遊具に目を向けるきっかけとなった。以降は「エアー遊具」をはじめとするイベント遊具の企画やレンタル、販売がメイン事業となったが、コロナの感染拡大を契機に防災や医療分野にも参入。大学と共同開発した技術は特許や商標の取得にも繋がり、会社の可能性をさらに広げている。

### 幅広い専門機関の力を借りて 特許取得を実現

近年まで、知的財産権を自社で取得するという発想には至っていなかったという山元社長。しかし、イベントを企画する中で、一部アイデアが他社の商標に重なるといった苦い経験があった。和解できたとはいえ、

これにより「事業を拡大していくためには知財や権利保護についても視野を広げなければならない」と感じ、知財への意識を強めるきっかけとなったそうだ。本格的に知財の取得に乗り出したのは、コロナ禍でイベントの開催が難しくなり、新規分野への販路開拓に取り組んだ時だった。地元の産業振興機構を通じて宮崎大学やメーカーとの縁が結ばれ、エアー遊具の知見を活かした『エアー式陰圧室装置』を共同で開発。これに際し、宮崎県発明協会やINPIT知財総合支援窓口などの支援を受けて特許を取得した。「模倣対策だけでなく、研究の証明として残るので、一緒に開発した方々のお墨付きをもらう意味でも重要だと思った」と山元社長は話す。

### 特許が開発力の信用につながり 新たな道を切り開く

その後はエアーを活用した防災・医療をテーマに、獣医分野での『動物診療用ベッド』でも特許を取得。現在は、商談の際に知財への姿勢を評価されることも増えたという。山元社長は「特許があるからこそ、大きな会社からも“開発力を信頼できる”という印象を持たれ、問い合わせをもらうことも多いのではないかと語った。今後はさらなるエアー造形物の活用を見出すべく、建設分野や消防・自衛隊、官公庁向けの製品開発を検討している。手縫いゆえにデザインに柔軟性があり、収縮可能で、取扱説明書が無くとも使いやすい

い、という素材の特性から、既に衝突実験等に使用されているほか、緊急性を要する場でも活躍が期待されている。ジャンルが異なれば新素材として特許を見込めるケースもあるため、積極的に取り組み、事業の成長を目指す方針だ。

### 知財の専門的な人材を育てるため 伴走支援も依頼



とはいえ、当社は「会社の展望に賛同してくれる人材が、近い立場同士で切磋琢磨し合ってほしい」との想いで、設立当初から新卒採用を基本としていたこともあり、特許や商標を初めて取得した頃は社内に専門的な知識を持つ人材がおらず、申請の流れや手順等、不安なところもあった。そこで、INPIT宮崎県知財総合支援窓口を通し、知財活用について伴走支援を依頼。弁理士や支援機関の担当者ともまめに連絡を取り、密な関係を築いたことで自社の知財担当者の知識が育まれ、現在は自ら課題に気付いてフォローできるまで成長した。また、商標の

チェックに関しては社内でマニュアル化し、経験の少ない社員であっても無理なくこなせるよう工夫しているという。

### 知財取得を目指す経営者へのメッセージ



山元社長は「私自身、知財には苦手意識があった。しかし、知財は必ず目的に基づいて取得されるものだを知ったことで、今は縁遠いものだと思うず、前向きに取り組む姿勢が大切だと感じている。まずは勇気を出して、相談できる窓口のドアを叩いてみてほしい」と話す。また、「支援機関の担当者と話し合う際には、費用や現実性など素人目線で気になる点も出てくると思うが、ほとんどの場合分かりやすく説明してもらえるので、臆せず質問することを勧めたい。私たちも早い段階で知財のパートナーに出逢えていれば、回避できた問題もあったかもしれない」と続けた。



エア素材で作られた、衝突実験用の車両（自動車）ダミー。わずか5分で設営できる



特殊な耐候性素材を使用したポータブル工業用シェルターは、災害時の仮施設にも有用



### 知的財産活用のポイント

#### 素直に“他者を信じ頼る”姿勢で 専門機関とも密に連携

当社の知財活用のポイントは、経済産業局や発明協会、INPITなど、地元宮崎県を中心に幅広い支援機関に積極的に相談していることである。そのため、課題となりやすい、特許領域の範囲を選定する際にも、弁理士と細かく相談しながら納得のいく

結論を導き出すことができたようだ。また、伴走支援では「知財は顧客ニーズをふまえ、自社の課題を追求する中で生まれるもの」と理解するきっかけにもなったという。山元社長は新規分野への参入の際にも「自社が門外漢の部分は大学やメーカーと協力する」という体制を取り、短期間での製品開発を果たしている。学生時代から培われた人脈や、常に会社の将来を見据えた柔軟な発想力が、知財の活用に繋がった。

## COMPANY DATA

取材：2024年12月

企業名：株式会社ワン・ステップ 所在地：宮崎県宮崎市清武町今泉甲4625-1 電話番号：0985-64-5399

URL：<https://onestep-miyazaki.com/> 創業：2002年 資本金：1000万円 従業員：37名

